

ここで、俣野氏の九州派に残された足跡について触れておきたい。

芸術運動には、外に向かってファナティックに活動を推進して行くものと内に在って理論的に運動体を支えるものと両方が必要であると思うが、俣野氏は後者に徹されたと思う。

1959年、筆者らが、九州派を脱退した時に俣野氏は退会されたと思うが、九州派に居られた間は、始終、表面に出られることなく、緑の下の力持ち的存在であった。九州派の命名、機関誌の発行、宣言文の起草、運営委員会の設置、現代思想（特に、実存主義）の講座、会員達の意見発表等の勉強会の提案等、われわれ未熟な会員の足らざる所を補う指導をされて、九州派の運動の上で大きな役割を果たされ、欠かすことのできない存在であった。その功は、没すべからざるものと思っている。

余談ではあるが、先に述べた勉強会について思い出したので記しておきたい。会場は毎回、寺田健一郎氏のアトリエであったが、会員の出席はいつも10名前後ではなかったかと思う。

俣野氏の提案で、最初の講座は実存主義と決まり、講師の人選は寺田氏の知人で、当時、九大のフランス文学研究室におられた、有田忠郎氏。（現西南学院大学文学部教授）に頼むことになり、寺田氏と二人で九大の研究室へ交渉のため訪ねて行ったことを覚えている。

その時の講師、小柳氏は筆者が西南学院大学時代の1952年、福岡六大学美術連盟を結成し、その年と翌年位に、当時、天神にあった朝日新聞福岡総局で、福岡六大学美術展を開いた時の九大美術部のメンバーとして、確か風景画を出品されており、1,2度顔を合わせたことのある方であった。

その講義の内容は、最近、偶然の機会に見つかった小さなメモ帳にメモしたものが手元にあるので拾い読みしてみると、実存主義の主として審美的局面について話されているが、フッサールからハイデッガーを通じ、サルトル、メルロー＝ポンティに及ぶ現象学の流れについて説き起こされて綿密なものであり、今日、なお現代美術に携わる者にとっては、実に示唆深い貴重なレクチャーであったと思うのであるが、難解であり、当時としては、全然歯が立たなかった様に覚えている。

なお、何回目かの勉強会の時に筆者が詩人画家アンリ、ミショオがメスカリンの服用による幻覚によって、表現領域を拡大したという話をしたことがあったが、会員からの反応は殆どなかった様だった。

余談が長くなってしまったが、ペルソナ展に戻すと、筆者はどうしたわけであるか、ペルソナ展を見ていない。この展覧会が翌年の九州派結成の布石として果たした役割は大きいと思う。

ペルソナ展が前例となり、九州派が出来た翌 57 年 11 月 2 日より 4 日まで、同じ場所で九州派全員と詩科同人による、グループ Q・詩科アンフォルメル野外展を開いているが、詩料から何名出品されたかは分っていない。翌 58 年 11 月 14 日から 16 日まで、同様に第 3 回九州派街頭展の名の下に開いているが、その時は詩人からの参加はなく、九州派も全員の出品ではなく、田部光子、小幡英資、菊畑茂久馬、斎藤秀三郎、桜井孝身、寺田健一郎、長頼子の諸氏が出品されている。（「九州派」第 2、3 号による）